

百合子賞 正賞 受賞作品

本当の友達

郡山市立郡山第二中学校

私の日常 side 花菜

「行つてきまーす。」

今日もつまらない一日が始まった。

わたしの名前は望月花菜。よくいる普通の中学二年生。特に優れていないところもないから自己紹介といつてもこれぐらいしか言うことがない。

「おはよう。」

みんなに笑顔で挨拶をする。そんなわたしに一番に近づいてくるのが、

「おはよう！花菜！」

誰よりも元気にハキハキと話す石宮ゆり。我が二年一組の学級委員。二年生でテニス部の副部長も務めている。「花菜」なんて、馴れ馴れしく呼んで良いなど一言も言った記憶はないが、気づいたらそう呼ばれるようになっていた。

「おはよう望月さん。」

「おっはー。」

「どうも。」

次々にやってくるのは、加賀ゆず葉、東海林紗夜、佐田実乃里の三人組。クラスの真ん中で周りを気にせず大きい声でテレビ番組の話などをして笑っている人達。仲がいいのかと思えば、三人の間にはトラブルも多い。三人とも気が強いので、クラスの大半から恐れられてもいる。今日の佐田さんは、ご機嫌斜めらしい。

わたしは一人でいることは気にならない。でも、人に嫌われたくはない。だから、みんなに優しくする。いつもは、石宮さんと一緒にいることが多い。石宮さんがよくわたしのところにやって来るから。

今日も石宮さんと体育館に向かう。石宮さんは、昨日放送されていたドラマの良さを力説している。正直、わたしはそのドラマを見ていないから、良さも何もわからない。でも、「確かにー。」とか、適当な相づちを打って、いい感じに笑いながら話を合わせる。笑つていながらも内心、「どうせあなただって……。」

と考えてしまう自分の気持ちを押し殺す。ダメダメ、話に集中しなきゃ。雲の間から見える太陽の光に目を細めて溜息をそとつく。笑顔で石宮さんと話しながら、今日もわたしの心の中にはぶ厚い雲が垂れ込めている。

花菜との出会い side ゆり

「はい。私がやります。」

「あ、では他に立候補者がいないのであれば石宮さんに学級委員をお願いしたいと思います。皆さんよろしいですか。」

「はい。」

あれは、入学して二日目。一年三組では学級委員を決めていた。初め私は学級委員なんてやるつもりは無かった。面倒だし、既に決まっていた男子の委員も頼りなさそうだったから。でも、女子が誰も委員をやり

たがらず、なかなか決まらなくて時間が勿体ないから渋々立候補したのだ。小学生の頃からクラスのまとめ役にはよく抜擢されていたから、学級委員になったことへの不安は特になかった。

だが何故だろう。一学期も終わろうとする今、あの時の自分の判断を後悔しない日はない。中学の学級委員は、小学校の時よりもイライラする。男子のやんちゃさも、女子の面倒くささもあまり変わらないのに。私の心が狭くなったのかな。そういえば、最近些細な事にもイライラする気がする。そして、そんな私をさらに苦しめような事件が起きた。

ある日の学級活動の時間、音楽祭の合唱曲決めが行われた。進行は学級委員の私達に任された。音楽の先生から預かっていた候補曲のリストを配り、みんなにどれが良いか考えてもらおう。そして、私は問いかけた。「皆さん、どの曲が良いか、演奏したい一曲に挙手して下さい。」

ここからが大変だった。クラスの人数と挙げた手の数が合わないのだ。何度やり直しても増えたり減ったり、そのうちに、

「速くしてよ。」
とか、

「もう、挙がってるだけで良くない？」
という無責任な声が上がりました。

先生には、どの曲に何人が手を挙げたか正確にメモしてくるように言われていた。そうじゃなければ、私だって、こんな話し合い適当に終わらせている。無責任な言葉が飛び交う中、今にも爆発してしまいそうな自分の怒りを抑えながら何とか曲決めを終えた。

話し合いが終わった後は、ストレスと何処にも出せない怒りで気持ち悪くさえなっていた。「ええっと」「あれ？」とうろたえるばかりで、何の助けにもならなかった同じ学級委員の男子。あいつは、結局何をしていたのか！クラスの人達だって、「早く終わらせてよ。」じゃないし！ああもう！

「だいじょうぶ？石宮さん。」

ふわっとした女の子の声があった。どうしよう。ついに幻聴まで聞こえてきた。

「あれ？石宮さんってば。」

再度、呼ばれた気がして、怒りで硬直していた顔を上げた。そこには望月さんがいた。

「望月さん？どうしたの。」

私が聞くと彼女は驚いた表情で、

「いやいや『どうしたの』じゃないよ。聞いているの、わたしの方だし。なんか話し合いが終わってから石宮さん抜け殻みたいになってるから。」
そうか、さっきのは幻聴じゃなくて望月さんが私を心配して声をかけてくれたのか。なんて良い人なんだ！

「あ、ごめんごめん。大丈夫だよ。心配してくれてどうもありがとう。」
「そう？さっきの話し合い、学級委員の男の子は何もしないし、クラスのみんなは石宮さんを困らせるようなことしか言わなくて石宮さん一人で大変だなんて思ってた。でも、そういうわたしもみんなに何も言えないで見てるだけになってしまったから申し訳なくて。だいじょうぶなら良かった。」

最後に「何かあったら聞くとよ。」と言って望月さんはどこかに行ってしまった。

驚いた。あんなに私のことを考えてくれていて人がいるなんて。なんてよく私の気持ちを分かってくれているんだろう。それに、なんて優しいのだろう。枯れ果てていた心が彼女の言葉で潤っていくようだ。

「ああいう人もいるんだねえ。」

気づけば誰もいなくなっていた教室に私のつぶやく声が響き渡る。ゆつくりと私は次の授業の準備を始めた。

花菜の「優しさ」 side ゆり

「花菜、体育館行こう。」

「そうだね、行こっか。」

あれから一年が経った。二年になってクラス替えがあったが、また花菜と同じクラスになれた。「石宮ゆり」の名前の遙か下に「望月花菜」の名前を見つけた時は、飛び上がる程嬉しかった。今では、私は「望月さん」ではなく「花菜」と呼んでいる。花菜が相変わらず「石宮さん」と呼んでくるのは、他人行儀な感じがして、本当は少し不満だけど、まあ、仕方ない。

今日は一組対二組でドッジボールをやった。試合は白熱していた。男子も女子に容赦なくボールを当ててくる。怖いけど仕方ない。そんな時、誰か男子の投げたボールが加賀さんに思いつき当たってしまった。当たった勢いで加賀さんは転び、足を擦りむいてしまったようだ。ボールを投げた男子は、

「ごめん、加賀さん。」

と謝りに行ったが、加賀さんは彼をきつくにらんで、

「ちよつと痛いじゃない。普通、男子が女子に本気で当てにくる？」

怒りで肩を震わせている。加賀さんのあまりの怒り様にみんなが固まる。授業中だし、わざとじゃないし、そこまで怒らなくても、なんて思っていたら、

「加賀さん痛いよね、だいじょうぶ？私、絆創膏持つてるよ。良かったら使って。あ、それ保健室行く？」

花菜が加賀さんのところへ駆け寄っていった。いつかのように「優しい」声で加賀さんに声をかけてあげている。私はちよつと驚いた。感情の起伏が激しくて、自己中なところのある加賀さんは、たぶん花菜の苦手なタイプだろうなと思っていたから。

「ありがとう。絆創膏はもらう。保健室は行かなくていい。体育を続けるから。」

加賀さんが、ボールを当てた男子をにらみながら立ち上がる。体育の授業が再開した。

その後は何事もなく、無事に体育の授業が終わった。加賀さんも結局楽しんでやっていた。というのも、あれからみんなが全く彼女を狙わなくなったからだけど。

教室までの道のり、私はどうしても気になって花菜に直接聞いてみた。

「花菜、よく加賀さんに声かけられたね。特に親しくもないのに。」

「そう？でも、困っている人がいたら、声をかけるのは普通でしょ。みんなも、もつと声をかければいいのに。わたしは、固まっていたみんなの方にひやつとさせられたよ。」

笑顔で話す花菜の言葉がちよつとだけ胸に刺さった。去年の出来事が思い出される。

委員の仕事にイライラしていた私に優しく声をかけてくれた花菜。あの時、花菜は私だから声をかけてくれたわけじゃないんだ。私が困っていたから、声をかけただけなんだ。じゃあ、花菜にとっての私って何？花菜にとっては私も加賀さんも変わらないってこと？

その体育の日から、私は花菜の行動を素直に受け止められなくなってしまった。相変わらず花菜は優しい。誰にでも、同じように。今だって、ふざけていた男子が落とした消しゴムを拾ってあげている。渡す時は、天使のような笑顔を浮かべて。

東海林さんと佐田さんがプリントを持って花菜のもとへ歩み寄っている。

「これ、配っておいて？」

「私のもね。」

明らかに人にものを頼むときの態度では無い。最近また例の三人組の

中でトラブルがあったらしいから、二人ともムシヤクシヤしているのだらう。だからといって、自分の仕事を人に押しつけていいわけがない。私は、一言言つてやろうと立ち上がる。それと同時に花菜が口を開いた。「いいよ。任せて。」

嫌な顔一つせず、花菜は二人からプリントを受け取り、配り始める。私はどんな時も誰に対してもどこまでも優しい花菜にモヤモヤした気持ちを抱えながら、その場に突っ立っていた。

放課後、教室には花菜と私しかいなかった。私は花菜に、皮肉っぽく言ってしまった。

「誰に対しても優しいよね、花菜は。」

「そんなことないよー。でもありがとう、そう言ってもらえて嬉しいよ。」いつも通りの優しい笑顔。無性に腹が立つ。花菜は悪くないのに。ただ、みんなに優しくしているだけなのに。分かっているけど、苛立ちは収まらない。私はさらにひどいことを言ってしまった。

「花菜ってさ、本当にみんなに優しくしたいと思ってるの？」

一度、言い出してしまうと、私の口は止まらなくなってしまった。「花菜だって人間なんだから、好きな人や、嫌いな人っているでしょう？誰にでも心から優しくなんてできないよね。なのに、何で…何でみんなにいい顔しようとするの？ねえ、教えてよ。花菜の優しさって本物のなの？」

さすがに言い過ぎたと思って、おそろおそろ花菜の様子を窺う。花菜は今まで私が見たことのない、複雑な表情をしていた。でも、すぐに笑顔に戻り言った。

「そうだなー。どうなんだろうね。わたしもよくわからないなー。ごめんね、これ小さい時からの癖みたいなものだから。」

「癖って何。誰にでも優しくするのが癖ってこと？花菜にとっては、わたしも、加賀さんも、他の人も同じってことだよ。一年生の時のあの優しさも本当はわたしのこと気遣っていたわけじゃなかったってことで

しょ？今まで一緒にいたけど、私のこと、本当の友達って思ってたなかったんでしょ。」

私はもう笑顔を作る余裕もなく、こみ上げてくる涙を堪えることだけに集中していた。花菜は、慰めるように私の肩に手を置き、でも顔は辛そうに言った。

「じゃあ、石宮さんに聞くけど、石宮さんの言う、『本当』の優しさって何？」

「……え？」

「……『本当』に優しければ、『本当』の友達ってできるの？」

花菜の声が震えている。その瞳から、一粒の涙がこぼれ落ちた。

それを隠すように、私から逃げるように、花菜が走り去っていく。バイバイも言わずに。

花菜のあんな辛そうな顔は初めて見た。私は花菜を何も理解していなかったのかもしれない。たくさん優しくしてくれたけど、そこに花菜の気持ちは籠ってはいなかった。少なくとも、私は花菜に『本当』の友達だと思ってもらえてはいなかったんだ。そう思ったら、あつという間に教室の床板がぼやけ、歪んでいった。もうすぐ部活が始まる。でも、そんなのはどうでも良く思えた。誰もいない教室の床に、ぼつりぼつりと涙の染みが広がっていった。

わたしの「優しさ」 side 花菜

『はあ…はあ…やっと終わった…』

わたしは、友達に頼まれた用事を終えて、急ぎ足で、三年一組の教室に向かった。扉の向こうに赤いランドセルがのぞいている。よかった、教室には、まだ誰が残っているみたい。

『ありがとうって言ってもらえるかな、優しいねって言ってもらえるか

な！』

純粹に、そんな期待をしながら、わたしは弾むような足取りで歩いて行く。しかし、中から聞こえてきた言葉が一瞬で私の足を凍り付かせる。『望月つてき、何でもあたし達が言う通りに動いてくれるよね。こういうのつて、しもべつて言うんだつて。おねーちゃんが言つてた。』

『へえ、あいつにピツタリじゃん！』

『望月花菜のための言葉みたい！』

いつも「花菜ちゃん、花菜ちゃん」と明るく声をかけてくれていたみんなが口々に言う。教室から飛んでくる数々の言葉が容赦なく突き刺さる。何が起こつているのか分からない。どういうこと？ どういうこと？ 涙を堪えながら、そそくさと、賑わう教室から荷物を取る。そして、階段も廊下も、大雨も関係なく家まで全力で走る。頬をつたつている水が、自分の涙かも雨かも分からないまま、ただただ走つた。

『……わたしつて「しもべ」なの……』

がばつと起き上がる。窓から入つてきている太陽の光を見て、状況を理解した。

「夢か……。」

気づけば頬を涙がつたつている。小学三年生の時の嫌な思い出。また夢に見てしまった。昨日、石宮さんにあんなこと言われたからかもしれない。

『花菜の優しさつて本物なの？』

『私のこと、本当の友達つて思つていなかったんでしょ。』

石宮さんの言葉が頭の中でぐるぐる繰り返される。彼女の悲痛な表情を思い出すと胸が痛い。だって、彼女の言うことは紛れもない事実なのだから。私は、彼女のこと、他の誰のこと、本当の友達とは思つていない。人が怖いんだ。なぜ彼女はあんなにもわたしを構うのだろう

か。ずけずけと踏み込んできてほしくない。もうあの日の二の舞にはなりたくない。もう、これ以上傷つきたくはないのだ。嫌われない程度に優しくしていればいい。こんな世界に本当の友達なんてない。わたしは誰も信じない。そうじゃないと、また自分が悲しむことになるんだから……。

あの日の二の舞 side 花菜

あれから数日がつけど、わたしも石宮さんもあの日のことには触れないでいる。移動教室の時はなんとなく一緒に行くけど、その間、特に何も話さない。わたしのみんなへの接し方も変わらない。

今日もいつものように過ぎていく。用事を頼まれたら笑顔で引き受けるし、困っている人を見かけたら声をかける。しかし、そんなわたしがミスをしてしまった。

「ちよつと、望月さん。」

黙々と帰りの準備をしていたら、加賀さんに声をかけられた。口調がとてもしつこい。もしかしなくても、怒っている？

「どういうこと？ さっき、先生に怒られたんだけど。ワークがまだ、運ばれていないつて。私、あんたに頼んだよね？」

言われてはつとした。すっかり忘れていた。そうだ、確かに、頼まれていた。どうしよう。このままじゃ、加賀さんに嫌われる。

「ごめん、加賀さん。わたし、先生に言つてくるから。忘れていたのはわたしですつて。少し待つてくれる？」

慌てて、職員室に行こうとすると、

「いい、行かないで。あんたが話したら逆に怒られるでしょ。自分の仕事を人に押しつけるんじゃないつて。馬鹿じゃないの。」

「本当は、ゆず葉のこと先生にチクリに行こうとしてるだけですよ。」

「マジ最低。」

この間までぎくしゃくしていたのに、こんな時ばかり意気投合する東海林さんと佐田さんが便乗してわたしを責める。最悪のパターンだ。どうしよう。なんと言ったら良いか分からない。とりあえず謝っておこう。

「ごめんなき……。」

「馬鹿なのも最低なのもそっちでしょ！」

威勢のいい声が出て、驚いて顔をあげると、教室の入り口に石宮さんがいた。扉に手をつき、息を切らして立っている。よく見れば、その額には汗まで浮かんでいる。

「加賀さん、あなたさ、自分に任された仕事を花菜に押しつけたくせに、花菜が忘れたからって怒るなんて、おかしいでしょ。そもそも、自分の仕事くらい自分でやりなよ！佐田さんと東海林さんも花菜を責めるのはお門違いでしょ。友達なら、代わりにワークぐらい運んでやればよかったですじゃない。いつもいつも、花菜に面倒ごとを押しつけておいて、忘れただらって責めるのは、可哀想でしょ！」

石宮さんのあまりの剣幕に、三人組も恐れをなしたのか、ふて腐れように、

「ごめん、望月さん……。行こう。」

と言うと、どこかへ行ってしまった。

「本当」の友達 side 花菜

静まりかえった教室。遠くで鳴いている鳥の音が響き渡る。そんな状況に耐えられなくなったわけではない。しかし、思いがけない石宮さんの言葉に、私が五年間、誰にも言わずに抑えてきた様々な気持ち、堰を切ったように溢れてきてしまった。

「……なんで……なんで助けたの……っなんで私にそんなに構うの？」

「……。」

「……っ、今の見て分かったでしょう？わたしなんて……わたしなんて……しもべでしかないんだよ……。お願いを断る権利も無い……。断れば縁を切られてしまう……。みんなにとって都合のいい、ただのしもべ……。石宮さんだって……。そう思ってるんでしょう？黙ってないでさ……。教えてよ……。うう……。」

一度出てしまった涙は、もう止まってくれなかった。一粒、一粒また一粒とわたしの頬をつたい落ちていく。その時、震える肩に柔らかい温もりを感じた。いつもわたしがやっていたものとは違う……。暖かく優しい、おずおずと差し出される手の温もり……。

「ねえ、花菜。世の中に、自分のしもべを、他人に嫌われる危険を冒してまで助ける主人っていると思う？」

「……？」

「話してくれてありがとう。やっと分かったよ。花菜が誰にでも優しくする理由。」

「……？」

石宮さんの言っていることが、まるで理解できない。今ので何がわかったっていうの？

わたしが怪訝な顔でいると、石宮さんは、それを察したかのように話し出した。それは、愚かな子どもに言い聞かせるような、優しい優しい声だった。

「私はね、純粋に花菜の『本当』の友達になりたくて今まで一緒にいたんだよ。だから、この間、花菜に『本当』の友達と思われていないって知って、かなりショックだった。大打撃だよ。」

石宮さんが苦笑しながら、わたしの顔をのぞき込む。

「でも、やっぱり花菜のこと嫌いになれなかった。それどころか、意地でも『本当』の友達だって認めさせてやるって思った。だって、やっぱり

り、花菜が好きだから。好きだから、助けたいって思うし、理不尽なことでされてたら、腹も立つんだよ。確かに優しくされたのがきつかけだったかもしれないけど、優しくないからって、花菜のこと、嫌いだななんて、思わない。」

「……そうなの？だって……。でも……。」

「でもじゃないよ。さあ、話してみてよ。」

「……話すって……何を？」

「何をもって過去に決まってるでしょ？」

「過去？」

「花菜が本当の友達なんて、いるはずがない、できないって思うようになった理由。さつき、しもべとか言ってたよね。花菜、昔、友達となんかあったんでしょ？」

驚いて言葉も出なかった。わたしを理解しようとしているの？石宮さんのことを友達とは思っていなかったわたしのことを？優しくなくても嫌いじゃないって。好きだって。そんな子が本当にこの世界にいたんだ……。喉の奥の方から熱い塊がこみ上げてくる。

「実は……。」

わたしは、石宮さんに全て話した。小学校三年生のあの日のひどい思い出を。石宮さんは、私の話がおわるまで、じつくりと話を聞いてくれた。

「ありがとう、話してくれて。私嬉しい。花菜が自分のこと、私に教えてくれたことが。」

「……ありが……と……。」

涙で震える声で何とか伝えられた。

石宮さんは、慰めも同情もしなかった。ただ、私が話をしたことを喜んでくれただけ。でも、わたしの心は満たされていた。胸の奥がほんわか温かくなる。

「ねえ、私、花菜の友達になれないかな。」

本当のね、とらしくなく、もじもじしながら、石宮さんは言った。わたしは涙を拭い、何のためらいもなく、言えた。

「もちろんだよ。こちらこそ、改めてよろしくね。それと、ごめん……。いろいろ嫌な思わせせたよね。」

おそろおそろ石宮さんの顔をのぞき込む。

「いいよ、もう気にしなくて。それより嬉しいよ！やっと花菜に『本当』の友達だって認めてもらえたんだもん！」

いつものしつかりした凛々しい石宮さんの満面の笑みがそこにあった。それだけじゃなく、ぴよんぴよん飛び跳ねて無邪気に喜んでいる。それを、わたしは笑顔で見つめる。

「ところで、なんで教室に来れたの？まるで、狙ったようなタイミングだったけど……。」

「あーまあ聞いてよ。私さ、先生に呼ばれていたから、職員室に向かったの。そしたら、眉間にシワを寄せて、なんかぶつぶつ言いながら、教室に向かう加賀さんとすれ違ったんだ。そして、そのぶつぶつの中に花菜の名前が出てきたから、あ、これは何か起こるな、と思ったの。」

「すごい……。」

「でしょ。で、速く戻らないとまずいなって思ったんだけど、やっぱり先生からのご用だから、すぐには教室に戻れなくて。だから、用件が済んでから、教室へ猛ダッシュで戻ったんだ。そしたら、案の条ってこと。」

「ありがとう。職員室から教室まで遠いし、階段も多くて大変だったでしょう？」

「まーね、でも、花菜への愛の方が大きいし！愛の前なら階段なんて全然大丈夫だし！」

「そーなのー？ずいぶん息切れてるように見えただけど、わたしの気のせいであったかなー。」

「うわ、これが真実の姿？ブラック花菜！」

あはは、と二人で笑い合う。窓の外には満点の青空。私の心も、同じようにきらきらと輝いていた。

その後 side ゆり

あれから月日はあつという間に経ち、私達は中学三年生になった。花菜は、前よりもすこく明るくなった。今もクラスの子と楽しそうに話している。「本当」に楽しそうだ。

「ゆり！次、体育だよ、いこ！」

いつの間にか友達との話も終わって、私のもとに駆け寄って来る。いつからか、花菜も私の事を「ゆり」と呼んでくれるようになった。「本当」の友達の証のようで嬉しい。

「そうだね。さあ気合い入れてドッジボールやるぞ！」

ガッツポーズをして、教室を出る。

「気合がから回って当たらないんだよ、石宮さんは。」

「確かに！」

「言ってる。」

いつの間にかいた例の三人組が口々に言う。あの日を境に、少し大人しくなった三人組。あれから、花菜は三人に対して、嫌なことは嫌だというようになった。初めて花菜が彼女達のお願いを断った時の、三人の顔は忘れられない。正直になった花菜の言葉に、彼女達もいろいろ考えさせられるところがあったのだろう。花菜が彼女らをどう思っているかは分からないけど、一緒にいても嫌な顔はしていない。心から笑っている花菜を見ると私の頬も自然と緩む。

その日の授業中、私と花菜は全てのボールを見事よけきった。加賀さんは今日も豪快に当てられている。彼女はもう怒らない。

「当たっちゃった。」

と言って素直に外野に出て行った。

終始盛り上がりを見せて授業は終わった。私は、教室に向かって花菜と肩を並べて歩く。

「楽しかったね。」

「うん！ゆり、たくさんよけてすごかったね。」

「まーね。でも、花菜だってキレッキレでボールをよけてたじゃん！」

「そうかな。ゆりには負けるよ。もつとも、ゆりの場合ボールのほうがゆりを怖がって、逃げていくような……。」

ちよつと意地悪そうな目をしてからかってくる花菜。前よりも生き生きとして。そんな私たちのおしゃべりは、まだまだ続いていく。

その後 side 花菜

わたしは、大分人と接することが怖くなくなった。ゆりが理解してくれるから、恐れることは何もない。わたしが「本当」の自分を見せるようになってから、わたしの周りは賑やかになった。例の三人組もそうだし、他のクラスメイトも以前より声をかけてくれる。

「おはよう」

今日も、みんなに元気に挨拶をする。

「おはよう！花菜！」

いつも通り一番に駆け寄ってくるのはゆり。

「おはようよ」

「おっは！」

「どうも…じゃなくて、おはよう！」

そして、いつもの三人組。彼女達は、ゆりの凛々しき、真面目さ、厳しさに影響されて、変わった気がする。

「望月さんだ！」

「おはよー」

クラスメイトも気軽に挨拶してくれる。

「望月さん、最近すごく明るくなったよね。めっちゃ話しやすいし。」

「そう?」

「確かに。前はさ、本音が見えないっていうか、距離置かれてる感じしたよね。」

そっか、わたし、そんなふうに見えてたんだと改めて実感する。

「今の方が、人間って感じて絶対いいよ。」

「ええ、前のわたしは人間じゃなかったってこと!」

ひどーい、と抗議の声を上げるわたしをゆりは嬉しそうな顔をして見ている。

ゆりは初めて気づいてくれた。自分でも見失いかけていた、「本当」のわたしに。でも、今ではわたしだとして知っているんだ。他人にも自分にも厳しいけど、「本当」のゆりはすごく優しい事を。そしてそんなゆりがわたしは大好き。そして、そう思える自分が好きだ。

さあ、今日も、私の素敵な青春のページが幕を開ける。

(指導教諭／佐久間 志 保)

《作品の意図》

私は、今までの人生の中で、人間関係について難しいなと思ったことを小説にしてみました。純粹に人に「優しく」していたのに、周りからは「しもべ」と思われるようになってしまった花菜。友達だと思っていた花菜に友達だと思ってもらえてなかったことに傷つくゆり。周囲の人の「優しさ」に甘え、周りの人にきつくあたる加賀さんと、それに便乗する東海林さんと佐田さん……。私は、このお話の一部に、自分の体験を組み込みました。「人を平等に見る」、「人の善意に感謝する」、「友達がいる」、「我慢する」……。あたり前だと思っているものほど、誰もがあたり

り前に行くのは難しいことを、私は毎日の生活の中で身にしみて痛感しました。一方で、ではなぜ「あたり前のこと」は難しいのか疑問に思っていました。普通にみんなが行うことが「あたり前」ではないのか。しかし、このお話を作成するにあたって、それぞれの登場人物になりきって色々考えていたら、私なりに、何となく分かった気がしました。だから、ぜひ、このお話の様々な登場人物になりきって、「あたり前」について考えてみて下さい。そして、今度、身の周りにあるあたり前だと思っていたことについて、一人一人が自分なりに考え直すことができるきっかけとなれば幸いです。

《作品の寸評》

友達に対する「優しさ」とは何なのか。「本当の友達」とはどのような存在なのか。中学生が日々の生活で感じている思春期の悩みや不安、心の葛藤が、登場人物を通して見事に表現されている。登場人物が心の内側を深く見つめて語っているが、作者自身の深い内省の表れであろう。一部実体験に基づく記述があるとのことだが、そのことが作品にリアリティと深みを持たせていると思われる。

加賀さん、東海林さん、佐田さんの三人組を登場させた点も絶妙である。作品の中で重要な役割を果たしている。

また、構成の工夫も高く評価できる。「花菜」と「ゆり」両者の立場を明確に提示した八つの章立ては、読者を意識して組み立てられた構成となっていてとても読みやすい。

総じて表現は平易だが、泣く場面を「教室の床板がぼやけ、歪んでいった。」など、工夫の跡が見られる。

結末で、花菜が「そんなゆりがわたしは大好き。そして、そう思える自分が好きだ。」と自己肯定している表現に、読後の清々しさを感じた。

(審査員／宗 形 幸 子)